

異文化を背景に持つ親子が抱える問題に関する

インタビュー調査

三田村 徳美 山崎 瑞紀

子どもを持つ首都圏在住外国人 11 名を対象にインタビュー調査を行い、子どもの教育面でどのような問題を感じているか、について検討し、整理したところ、「授業システム、学校文化、日本語の問題、母国語・母文化の伝達、価値観のずれ、いじめ」の主に 6 つに分類された。全体として、家庭内の問題よりも学校に関わる問題の方が多く挙げられていた。学校での問題としては、学校教育が甘い一方で規則は厳しい点が取り上げられており、いずれも母国との違いが意識されていた。家庭内の問題としては、親の日本語力の低さのために子どもと学校の話ができない、勉強が教えられない、将来的に親子間で価値観のずれが生じてしまうのではないかと不安がある、などが挙げられていたが、全体としては少数だった。

キーワード：異文化、適応、教育、親子関係、コミュニケーション

1 はじめに

1980 年代以降、日本においても、ニューカマーと呼ばれるアジア系外国人居住者や日系南米人居住者が急増した。これらの人々が結婚し子どもを持つことで、異文化につながる子どもが日本の学校に通うケースが増えており、日本の学校にいかに対応するかが注目されている。このような中で、異文化を背景に持つ親子が、学校や家庭でどのような問題を抱えているのかを知ることは、彼らへのサポートを考える際に有用と考えられるが、これまでに十分な調査がなされているとは言い難い。そのため本研究では、異文化につながる子どもを持つ親を対象にインタビュー調査を行い、そうした親が、子どもの教育面でどのような問題を感じているか、について検討する。

[1] は、ニューカマーの子どもたちの学校適応は多様な形態をとりうるとし、その差異をもたらす主要な要因のひとつとして「家庭」があるとしている。彼らの研究では、3つのニューカマー・グループ（南米からの「出稼ぎニューカマー」、インドシナからの「難民ニューカマー」、韓国からの「上昇志向ニューカマー」）に属する家庭を取り上げ、彼らがどのような状況で、どのような「教育戦略」を採用するのかを調べている。特に、[2] は、

日系ブラジル人に着目し、来日時期別に、家族の「教育戦略」が変化していくことを明らかにした。

また、[3]によれば、日本での生活が長期化するなか、日系ブラジル人の子どものいる家庭のほとんどで二言語、つまりポルトガル語と日本語が同時に使われているという。親たちは互いにポルトガル語で話し、子どもにもポルトガル語で話し掛けるが、日本の学校に進学した子どもは日本語の方が流暢になり、ポルトガル語を話さないケースが増えていることを明らかにしている。一方、[4]は、国際結婚による親子間のコミュニケーションに注目し、特に、日本人とフィリピン人の国際結婚に焦点を当てている。結婚時、フィリピン人妻の 66% は日本語を少し、あるいは全く話さなかったのに対し、夫の 75% は家庭内の会話に日本語を用いており、夫婦間のコミュニケーションが十分にとれているとは言い難い状況であることが示唆された。そうした中で子どもが学校に適応できず、不登校になるケースのあることが報告されている。

これらの先行研究により、家庭内での問題として、特に言語や価値観に起因するコミュニケーションの困難さのあることが示唆されている。そこで本研究では、異文化を背景に持つ親子が、学校や家庭でどのような問題を抱えているのかの全体像を検討するとともに、特に親子間のコミュニケーションに関して、焦点を当てて検討を行う。

MITAMURA Tokumi

東京都市大学大学院環境情報学研究所博士前期課程 1 年生

YAMAZAKI Mizuki

東京都市大学環境情報学部情報メディア学科准教授

2 方法

2.1 被面接者

神奈川県（及び東京都）在住の外国人で子どもを持つ11名（男性1名、女性10名）。出身国内訳は、中国5名、韓国2名、アメリカ、パキスタン、ブラジル、フィリピン各1名である。外国人同士で結婚している者は8名、国際結婚の者は3名、子どもの年齢は生後9ヶ月～19歳で、小学校が最も多い。滞日期間は9年以上が9名と多く、家庭内での使用言語は、日本語のみ3名、母語のみ5名、日本語と母語の両方3名と様々だった。被面接者の属性別内訳を表1に示す。

表1 被面接者の属性

No.	出身国	夫（妻）の出身国	子どもの性別と年齢	家庭内の言語	来日時期（滞日年数）
1	アメリカ	日本	M11歳	日本語	1988年（滞日21年）
2	パキスタン	パキスタン	M11歳 M8歳 F9ヶ月	オールド語 日本語 英語	1997年（滞日12年）
3	ブラジル	ブラジル	M(高3) M(高2) M(中1)	日本語	1987年（滞日22年）
4	韓国	韓国	M5歳	韓国語	2005年（滞日4年）
5	韓国	日本	M10歳 M(小1)	韓国語	2008年（滞日1年）
6	中国	中国	M19歳	中国語	1995年（滞日14年）
7	中国	中国	F15歳	中国語	2000年（滞日9年）
8	中国	中国	M15歳	日本語 中国語	1991年（滞日18年）
9	中国	中国	F12歳	日本語 中国語	1999年（滞日10年）
10	中国	中国	M(小1)	中国語	2000年（滞日9年）
11	フィリピン	日本	M12歳 F11歳	日本語	1990年（滞日19年）

注) M: 男子 F: 女子

2.2 実施時期・手続き

2009年8月～12月。横浜市内で活動する在住外国人支援団体2つより被面接者を紹介してもらったほか、被面接者にも他の対象者を紹介してもらった。インタビューは、対象者の自宅、喫茶店、地区センターなどで1～2人の面接者（紹介者を含め）が行った。方法は半構造化面接で、1件につき40～90分だった。インタビュー内容は了承の得られた者のみICレコーダーに録音し、一定の基準でトランスクリプトを作成した。了承が得られなかった者は筆記記録をとらせてもらい、その記録を元に、記憶が鮮明なうちにトランスクリプトを作成した。

2.3 調査項目

インタビューにおける質問項目は以下のようなものであり、必要に応じて、その他の質問を付加した。

- (1) 来日のきっかけ、及び、今後の見通し（日本でずっと暮らす予定か、帰国する予定か、など）
- (2) どのような子に育てたいと思っているか、子育ての際に心掛けていることがあるか
- (3) 子どもの教育について、なにか困っている（いた）ことはあるか。ある場合は、どのようなことか
- (4) 子どもに母語・母文化を教えているか、教えたいと思うか
- (5) 幼稚園や小（中）学校として日本の学校に入れることをどう思うか、教員や学校への要望など
- (6) 子どもが日本で育つことで、日本人の価値観を身につけ、自分の価値観とずれてしまうのでは、といった不安はあるか

3 結果・考察

3.1 来日のきっかけ、及び、今後の見通し

被面接者11名中7名が配偶者（夫）の都合（仕事、留学など）により来日しており、夫が先に来日し、その半年～数年後に自身も来日したというケースが多かった。

今後の見通しに関しては、来日時期、夫の仕事、子どもの教育など、様々な要因が関わっているが、主に2つのものがみられた。

1つは、本人は母国に帰りたいと思っているが、子どもの教育や配偶者の仕事の状況を考えると日本で今後も生活する予定、と答えたケースである。「No.9:自分は、早く帰りたい。他の人に色々聞いてみたけど、中国の中学校は、日本の中学校よりレベルが高い。中国に帰って中学校に行かせるのはついていけなくなると思う。日本の学校がゆとり過ぎる。」など、子どもの学力の状況や、子どもが母国語を十分に話せないことを考慮し、今後も日本で生活を続ける予定と答えたケースが6件、夫の関係で日本において生活を続ける予定と答えたケースが2件（うち1件は夫が日本人）だった。子どもの関係で、と回答したケースは、「子どもが高校を卒業したら（大学に入ったら、大人になったら）帰ろうと思っている」と述べる者が多かった。

2つ目は親自身が母国に帰ることをあまり考えていない、また日本でずっと暮らすことをほのめかす回答をしたケースで3件が該当した。「No.3:今後の予定としては、帰国する予定はない。子供たちが育っちゃえば、社会人になったら、また考えるし。でも、今はもうこっちで根を張っちゃったかな。両親とか家族は（母国に）いるけど、会いに行ったりもできるし。」など、自身が留学生、研修生として日本に来日していたり、滞日期間が長期に

及んでいたりすることで日本での生活の基盤が既に整っているケースと言える。子どもが高校生以上になっているなど、教育についても一段落してきていることも要因の一つになるだろう。

3. 2 子どもの教育のことで困っていること、気になっていること

得られたインタビュー内容すべて（質問項目（1）～（6）への回答）を分析対象とし、「子どもの教育のことで困っていること、気になっていること」について述べられている箇所を抜き出し、同人物で重複した内容は除いたところ、計40件が抽出された。それらについてKJ法を用いて整理した結果、（1）授業システム（形式）12件、（2）学校文化（授業以外）11件、（3）日本語の問題5件、（4）いじめ2件、（5）母語・母文化の伝達7件、（6）価値観のずれ3件の大きく6つに分類された（表2）。困っていることはないと答えた親も3名いた。「母語・母文化の伝達」、「価値観のずれ」については、3.3で取り上げるため、本項ではそれ以外の4つについて報告する。

（1）授業システム（形式）

日本の授業システムについては、「英語教育への不満」、「授業が一方的」、「国際理解が足りない」、「宿題やテストが少ない」など、自身の育った母国に比べて日本の授業環境が悪いと述べている内容が多く含まれており、11名中6名がこれらの点について述べていた。特に、英語の進度の遅さについて心配していた。また、アメリカ、中国出身の親は、授業が一方的であることに不満を述べていた。アメリカや中国では、必ず質問する子どもがいるために、初めて日本の授業を見て驚いたということである。すべてではないが中国、韓国、パキスタンの親は、自身の母国での経験と比較して、宿題やテストが少ないなど、日本の授業システムについて「甘い」と考えていることがわかった。中国や韓国では日本よりも受験競争の激しいことが背景要因にあると思われる。

（2）学校文化（授業以外）

日本の学校文化についても、「給食」、「式などのイベント」、「規則」、「教員と生徒の距離」など多くの内容が挙げられ、11名中5名がこれらの点について述べていた。特に給食は、食べ方、給食の当番制、献立など多岐に渡っている。例えば、「No.2：日本は何でも入っているから、子どもの給食が、シチューにワインが入っているから。子どもたちは、食べられないものが多過ぎる。子どもはお弁当だったけど、あんまり食べなかった。何を食べているのか皆見ちゃう。すごい恥かしいから、食べなくなっちゃう。」。パキスタン出身のイスラム教徒であり、酒

表2 子どもの教育について困っていること、気になっていること

- | | |
|----------------------------------|---|
| （1） 授業システム（形式）（計12件） | |
| ①英語教育への不満 | （3件：No.2, パキスタン, 滞12 No.4, 韓国, 滞4 No.11, フィリピン, 滞19） |
| ②授業が一方的 | （2件：No.1, アメリカ, 滞21 No.9, 中国, 滞10） |
| ③国際理解が足りない | （2件：No.1, アメリカ, 滞21 No.2, パキスタン, 滞12） |
| ④宿題やテストが少ない | （2件：No.2, パキスタン, 滞12 No.10, 中国, 滞9） |
| ⑤クラスや先生のあり方への不満 | （2件：No.4, 韓国, 滞4 No.9, 中国, 滞10） |
| ⑥性教育が早すぎる | （1件：No.2, パキスタン, 滞12） |
| （2） 学校文化（授業以外）（計11件） | |
| ①給食について（食べ方、宗教によって食べられないものなど） | （4件：No.2, パキスタン, 滞12 No.3, ブラジル, 滞22 No.4, 韓国, 滞4 No.5, 韓国, 滞1） |
| ②入学、卒業などのイベントの手順やその意味がよくわからない | （2件：No.3, ブラジル, 滞22 No.9, 中国, 滞10） |
| ③学校にお菓子を持って行ってはいけないのは、厳しすぎ | （1件：No.3, ブラジル, 滞22） |
| ④日本の私立や公立のあり方への不満 | （1件：No.4, 韓国, 滞4） |
| ⑤先生と生徒の距離が遠い | （1件：No.3, ブラジル, 滞22） |
| ⑥スクールバスがない | （1件：No.4, 韓国, 滞4） |
| ⑦合宿など（宗教や風習によってできないことをしなければいけない） | （1件：No.2, パキスタン, 滞12） |
| （3） 日本語の問題（計5件） | |
| ①自分が日本語ができないため、子どもの情報がわからない | （2件：No.5, 韓国, 滞1 No.7, 中国, 滞9） |
| ②家族内で学校の話ができない、勉強を教えられない | （2件：No.1, アメリカ, 滞21 No.11, フィリピン, 滞19） |
| ③子どもの日本語が上手くないため、周りにうまく適応できるか心配 | （1件：No.10, 中国, 滞9） |
| （4） 母語・母文化の伝達（計7件） | |
| ①教えたいが、子どもが反発する | （3件：No.6, 中国, 滞14 No.7, 中国, 滞9 No.11, フィリピン, 滞19） |
| ②母文化を教える所がない、学費が高いなど | （2件：No.1, アメリカ, 滞21 No.4, 韓国, 滞4） |
| ③幼い時期に日本にきたので、日本語も母語も曖昧になってしま | う
（1件：No.5, 韓国, 滞1） |
| ④子どものアイデンティティの形成に影響 | （1件：No.9, 中国, 滞10） |
| （5） 価値観のずれ（計3件） | |
| ①母文化と日本文化の差異により、価値観のずれが生じる | （3件：No.1, アメリカ, 滞21 No.2, パキスタン, 滞12 No.4, 韓国, 滞4） |
| （6） いじめ（計2件） | |
| ①外国人であるために、いじめを受けること | （2件：No.5, 韓国, 滞1 No.7, 中国, 滞9） |

注）滞：滞日年数

や豚肉などは宗教上食べられないために、子どもにお弁当を持たせているが、給食費は払わなければいけないというケースである。学校に対応してもらい、その後、子どもも給食を取れるようになった。しかし、学校が給食面に対応してくれるケースは多くはないという。また、学校の規則に関することで、日本の学校ではお菓子を持って来てはいけないということが原則になっているが、その点に疑問をもち、日本の学校は厳しすぎるという親もいた。その他、「No.3：ブラジルでは、学校に行っても上下はない。だから、学校の中では先生であっても、それ以外は普通の友達。それが、もっとあったらいいかな。先生にもよるけど。大部分は、壁を感じる。」と、日本では教員と生徒（及び、その家族）との距離が遠いと述べる親もいた。

全体として、日本の学校の授業やスタイルには甘いと感じ、学校の規則などには厳しいと感じている傾向がみられた。

(3) 日本語の問題

日本語の問題としては、「自分が日本語ができないため、子どもの情報がよくわからない」、「(日本語ができないため)家族内で学校の話ができない、勉強を教えられない」、「子どもの日本語が上手くないため、周りにうまく適応できるか心配」といったものが挙げられ、11名中5名がこれらの点について述べていた。

また、これらの問題は、親の来日時期や子どもの成長とともに変化する傾向があった。滞日1年のケースでは、「No.5：一番は、やっぱり言語。やっぱり自分が日本語しゃべれないから、先生とか子どものことの相談も主人と一緒にできない。学校の『おたより』とかも、主人に訳してもらって、やっとわかる。日本語ができないと、子どものママと仲良くできない。」など、自分自身が日本語を話せないため、周囲との付き合いも疎遠になり、子どもの情報などが得にくいと述べていた。教育面での不安につながるとされる。しかし、このケースは、子どもも同様に日本語が話せず、母国語は話せるため、親子間でのコミュニケーションは取れていた。一方、滞日19年の親（フィリピン出身）の場合、「No.11：勉強も不安に思う。自分が教えたいけど、日本語も上手じゃないし。家の中では、日本語。子どもたちの言ってることがわからないこともあるけど、子どもたちの方が教えてくれる。」と述べている。子どもの成長とともに、子どもの日本語力が上がり、親より流暢になったことで、親子間のコミュニケーションに多少困難が生じる場合もあるようだ。これらのことから、来日して日が浅いケースは、親子とも日本語ができないために周囲との接触や情報取得に困難を感じやすいが、親子間のコミュニケーションには特に問題は生じない。しかし、時が経つにつれ、子

どもの方が日本語を流暢に話すようになり、子どもの日本語を親が理解できないというケースが出てくる。このように、滞日期間や子どもの日本語力により、問題が変化していくことが示唆された。

(4) いじめ

いじめについては、11名中2名が言及していた。「No.5：いじめとかは少し心配。前に、韓国人だから遊びたくないと言われたことがあった。日本語ができないだけ。子どもは、日本の血も入ってるのに。すごくショックだった。」と述べていた。もう1名は「外国人であるため、いじめを心配していたが、受けたことはない」と述べていた。

今回のインタビューの中で、日本の学校システムで高く評価されているものもあった。具体的には、社会科見学や遠足などであり、いわゆる学力を上げるための勉強とは異なる実践的な面が高く評価されていた。友人づくりやコミュニケーションのとり方など、社会的スキルの獲得面で、日本の学校システムを高く評価している者もいた。

3.3 家庭内での母文化と日本文化のバランス

ここでは、家庭内で母文化と日本文化がどのくらいの比重を占め、それが親子間コミュニケーションにどういった影響を与えているのか検討するために、(1)どのような子に育ててほしいか、(2)母語・母文化の伝達、(3)価値観の差異、の3つの側面から報告する。

(1) どのような子に育てたいと思っているか

日本の文化との差異の中で、特に良くないと思うものやしつけに関することなどは、日本の文化ではなく、母文化を優先させる親も多い。ただし、「No.11：日本の良いところは、教えてもらった方がいい。でも、イスラムやパキスタンのやり方で育ててあげたい。あなたはあなただから。皆のまねしないで。」など、母国の文化と日本の文化の両方を取り入れて育ててほしいという考えが目立った。

(2) 子どもに母語・母文化を教えているか、教えたいと思うか

母語を現在教えている者は5名、教えたいが現在は教えていない者は4名、「自由にさせている」者は2名だった。教えたことのないケースであっても、子どもと普段から日本語と母語を混ぜて使っていたり、母国にある期間、一緒に帰ったりするなどしており、程度は違うが子どもが母語を聞いて理解したり、話したりできるとのことであった。教え方としては、主に母語で話しかけたり、アニメ、映画、本、ゲームなどの母語メディアを使った

りと家の中で教えることが多く、母語や母文化を教えてくれる場所があれば利用したいと思っている親もいた。しかし、学費やそういった場所がないことを挙げ、家庭内のみで教えているのが現状である。

言語に関しては、家の中では母語を話すように心掛けていると述べた親でも、子どもは日本語の方が流暢であるため、複数の言語が家の中で話されているという事例も多く、親が母語で話し掛け、子どもが日本語で返すケースも少なからず存在していた。「No.10: コミュニケーションがとれないときがあるけど、そのつど日本語と中国語が混じりながら、説明したりしている。子どものレベルが上がるので、教育については難しくなってくると思う。日本語でわからないことが増えてくるし。」などと述べられている。こうしたコミュニケーションの取り方は、母語と日本語の両方を使用する経験にはなるが、必ずしもどちらとも上達するわけではない。現時点で話したり聞いたりすることはできるが、母語を書いたり読んだりするのはまだ難しいと話しているケースもある。

また、親に母語を教えられることを嫌だと子どもが主張するケースも3件存在していた。例えば、家の中では母語を話すルールにしているのに日本語で話したり、母語を教わっているときに、なぜ自分だけ母語を勉強しないといけなかつたかと反発したりするなど、主張の内容は多岐に渡っていた。そのため、現在は子どもが母語を勉強したいと思うまで教えないと考えている親もいた。

その他、両方の言語や文化を受容する事が、子ども自身のアイデンティティ形成に影響を及ぼすことになることを懸念する声もあった。「No.9: 毎年1カ月夏休みに(中国に)帰る。親戚や友達と遊ばせると、日本に帰ってきても2~3週間は中国語になる。でも、年齢と一緒に単語のレベルは上がってない。自分には、娘の言っていることがわかるけど、中国人が聞いたらわからないかも。今は、まだ若いけど。これから大人になったら、悩みができるかも。自分がどんな人なのか。中国人?日本人?それを解決してほしい。」など、中国出身の両親を持つが、日本で人生の大半を過ごしている子どものアイデンティティがどのようなものになるのか、心配する声もあった。

(3) 子どもが日本で育つことで、日本人の価値観を身につけ、自分の価値観とずれてしまうのでは、といった不安はあるか

「不安はある」と答えた者が3名、「不安はない」が6名、「どちらともいえない」が2名だった。「不安はない」と答えたケースが、中国出身者に集中していることが大きな特徴である。「No.8: 人間って環境に左右されると思う。アメリカとかロシアとかに行ったら、その色に少しずつ染まっていくと思う。これは自然なことだと思う。日本の価値観っていうか、親の価値観と違うっていうの

は、人間だったら、普通ありうること。」など、中国出身の多くの親が、「その土地にいるのだから、その土地の価値観や考え方が身につくもので、それでいいのだ」という考えを持っていた。「郷に入っては郷に従え」といった諺を口にする親も何名かおり、「不安はない」と答えた者に中国出身者が多い理由にはこうした考え方が関わっている可能性がある。

価値観のずれにおいて不安のある親は、母国の考え方の日本の考え方の差異の大きいことが影響しているようだった。例えば、パキスタン出身のイスラム教徒であるNo.2は、お酒や異性との関わり方、親や先生に対する態度について気にしていた。また、韓国出身のNo.4も、異性とつきあい方について母国と日本の違いを述べた上で、「韓国ではあり得ないことが日本では当然なことになるのがたくさんある。これが悪いとか良いとかの問題じゃなくて、ただ子どもが大きくなればなるほど私とのトラブルどんどん増えていくはずなのが心配」と語っていた。

その他、「不安はあるが、最終的には子どもが決めること」、「両方の文化を持っていてくれると嬉しい」という意見もあった。

今回のインタビューでは、親子間において考え方の差異による衝突を懸念する声はあっても、実際に起こっていると答えたケースは見られなかった。

3.4 全体的考察

異文化を背景に持つ親が、「子どもの教育のことで困っていること」は、「授業システム、学校文化、日本語の問題、母国語・母文化の伝達、価値観のずれ、いじめ」の主に6つに分類できることが示された。母国語・母文化の伝達や価値観のずれに関しては、あらかじめ項目を用意し尋ねているため回答が多くなるといった影響を考慮する必要があるが、全体として、家庭内の問題よりも学校に関わる問題の方が多く挙げられていた。学校での問題としては、学校教育が甘い一方で規則は厳しい点を取り上げられており、いずれも母国との違いが意識されていた。

また、家庭内の問題としては、親の日本語力の低さのために子どもと学校の話ができない、勉強が教えられない、将来的に親子間で価値観のずれが生じてしまうのではないかという不安がある、などが挙げられていたが、件数としては少数だった。複数言語を使用するコミュニケーションの形態では、親子間の会話が減少するのではないかと推測していたが、コミュニケーションをしていて困難を感じている親は思いのほか少なく、親子間コミュニケーションに起因する問題は、少なくとも親の意識としては大きな位置を占めていなかった。ただし、この点は本調査の対象者の滞日期間が長いこと、11名中7名が小学校以下の子どもを持っていることが影響している

可能性はあり、今後の検討課題として残された。

これらにより、異文化を背景に持つ親子をサポートする場合には、既述した「授業システム、学校文化、日本語の問題、母国語・母文化の伝達、価値観のずれ、いじめ」を考慮に入れることが有効と考えられる。「早期の英語教育の導入、国際理解教育、双方向的な授業、宿題やテストを増やす、学校の規則の緩和(あるいは見直し)」といった学校側へのニーズは、日本人のみを対象にしていた従来の教育現場では出て来なかった要請かもしれない。だが今後の受入れを考えると、こうしたニーズにも耳を傾けていく必要はあろう。それにより、日本人側にとっても恩恵が得られる可能性はある。

本調査でのインタビュー対象者の背景はさまざまであり、人数も多いとは言えないため、十分に分析できていない点も多い。本研究結果を一般化できるのか、という問題もある。したがって、今後はさらに被面接者を増やし、出身国や滞日期間、子どもの年齢によって抱える問題が異なるのか、等、検討していく必要がある。また、親からの視点だけでなく、子どもがどう認識しているのかを検討するため、可能であれば中学生以上の子どもを対象としたインタビュー調査などを行うことも考えられよう。

参考文献

- [1] 志水広吉 塚家由妃代 酒井明 家上幸子 児島明 堂寺泉:ニューカマー家庭の教育戦略—3つのエスニック・グループの比較から, 日本教育社会学会大会発表要旨集録, 51, 159-164, 1999
- [2] 児島明:ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー, 勁草書房, 2006
- [3] イシカワ エウニセ アケミ:家族は子どもの教育にどうかかわるか—出稼ぎ型ライフスタイルと親の悩み 宮島喬・太田晴雄(編) 外国人の子どもと日本の教育—不就学問題と多文化共生の課題, 東京大学出版会, 77-96, 2007
- [4] 西口里紗:揺らぐ母子関係のなかで—フィリピン人の子どもの生きる環境と就学問題 宮島喬・太田晴雄(編) 外国人の子どもと日本の教育—不就学問題と多文化共生の課題, 東京大学出版会, 171-189, 2007